『徒然草』、説話的章段45段からのアプローチ

――構想と創作性をめぐって

播摩光寿
（國學院短期大学教授）

はじめに

『徒然草』の読み方は、一つ一つの章段から直接には書かれていない教訓性とか、時代性とか、作者の人間性とかを読みとろうとする立場から読まれる傾向が強いようだ。それは全編を書かれてある順序通りに読んでいっても、なかなか一貫した流れが感じられないこととともに、随筆はそういうものとする通念からきていると思われる。なるほど各段はそれぞれ独立した主題のもとに捉えられる。しかし、伊藤博之氏（『徒然草入門』１９７８、有斐閣新書）も指摘するところだが、江戸時代前期に加藤盤斎が『徒然草抄』で「上段より心をうけて、みなかけりとしるべし」とする「来意」説を唱えて以来、西尾実氏（『つれづれ草文学の世界』１９６４、法政大学出版局）が解き明

かした八種の構成法の指摘などに見られるように、章段相互の関連も重要な意味を持っている。従来諸氏によって提起される二部構成論は、とかく成立に関わる点に目を奪われがちである。が、安良岡康作氏（『徒然草全注釈』上1967、角川書店）が第三十二段以前と第三十三段以降との間に思想的にも表現的にも断絶があると見るごときは、その過程はいかにあろうとも、視点を変えれば、これらも『徒然草』が現在見るような形で個々の章段が順を追って叙述された一個の作品として捉えるべきことを語っているとも言えよう。兼好は一個の作品として意図した主題を語るにふさわしい構想とその上に立った配列に意を注いだに違いない。

本稿では、「公世の二位の兄」に始まる45段を中心にして、いわゆる説話的章段の存在が語る、兼好が『徒然草』で意図した世界の一端を窺い見ることにしたい。

一　45段とその素材

（1）45段と従来の読みとり

公世の二位の兄、良覚僧正と聞えしは、きはめて腹の悪しき人なりけり。

坊のかたはらに大きなる榎の木のありければ、人、「榎の木の僧正」とぞ言ひける。「この名しかるべからず」とて、かの木を伐られにけり。その株のありければ、「切杭の僧正」と呼びけり。いよいよ腹を立ちて、切杭を掘り捨てたりける跡、大なる堀にて有ければ、「堀池の僧正」とぞ言ひける。

45段は、よく知られる良覚僧正のあだ名をめぐる話。名門の出身で僧正の地位にまで上り詰めた高僧が、自身の怒りっぽい性格をどうしょうもできなかった。兼好は自らの判断・評価・批評を示す言葉は一切記述せず、伝承の事実をありのまま書き記した感が強い。そのせいか、古くは良覚が怒るべきでないことに怒った結果の愚行、新しくは良覚の行動にユーモアを見ようとする視点から読み取られている。安良岡康作氏（前掲書）は、

強い個性に対する興味・関心から、（中略）良覚僧正の自尊心の強い、評判を苦に病む、怒りっぽい性格の一貫性と、それからあだ名をつけてからかわずにはおかない周囲の人々の一貫性とが、平行して書かれているところに非常におかしさが感じられる。

と説く。また、表現構成そのものに内在する一種の力が『徒然草』の文体の魅力であるとの立場から、伊藤博之氏（前掲書）の次のような卓見もある。

良覚僧正のすぐれた学徳のなかみを知るすべもない一般世人が、大僧正の地位にまでのぼった偉い坊さんを巨木の榎木に比して敬愛の意を表したにすぎない呼称を「この名は不都合だといって、その木を切ってしまった」。（中略）呼称にこれほどまでにこだわる良覚の偏固さと自らの誇りを守り抜こうとする一途な情念に共感を寄せる視点に立つ時は、僧正の行為の表面だけを見て、敬愛から揶揄へと無定見に態度を変じてゆく民衆の軽薄な無責任さを批判し、民衆の視点を取り込む時は、世評にこだわり、むやみと腹を立て理不尽な行動に出る僧正の人間的な弱点を強調するような文章を同時に実現してしまう。一言の批評もさしはさまない記述がそのことでかえって豊かな批評精神を内蔵しているといった体の文章を実現（している）。

兼好がこの話のどこに着目し、どういう意味を持たせようとしたのかについては、それぞれに容認できるところで

ある。しかし、なぜこの話を『徒然草』話として選択・採用したのか、又ここに置くことが、『徒然草』の世界とどう関わるのかについては言及するものがほとんどないのが現状。つまり、兼好がどういう意図でここにこの話を書いたのかという点は未だ解明されていないのである。

(2) 45段とそのその素材をめぐって

この話は、古く橘純一氏(『正注つれづれ草通釈』(1938・4)によって『仁和寺諸師年譜』の後半部に次に挙げるような同内容の話があることが紹介された。

西院の僧正信証は、輔仁親王の息にして、後三条院の御孫なり。三宮の僧正と称す。又寺門の傍に於て大いなる榎有り。これに因りて榎木の僧正と称す。僧正これを忌みてその木を伐る。世又伐株の僧正と称す。又これを嫌ひて、その根を掘る。世又堀池の僧正と称す。終に以て称号と為す。(中略)康治元年(注、一一四二)四月八日入滅す。年五十五。　(原漢文、私に書き下す。傍線部は『徒然草』と同文、波線部は叙述が異なる箇所)

橘氏自身も、信証話に仮託し良覚に付会した伝説的な話を兼好は全く事実と信じて書いているようだとするように、それ以後も「信証」と「良覚」の人名の相違と、成立が『徒然草』よりも後という点から、『徒然草』との直接関係は諸氏によって否定されている。

『群書解題』によれば、『仁和寺諸師年譜』は諸門跡譜などの各種関係資料から集録して、延元年間(一三三六〜三九)より遠からぬ頃一応の集成を終わったものと言われる。下巻の成立(高乗勲氏)あるいは補訂(安良岡氏)が延元年間に行われたとの説もある。実は『徒然草』との先後関係は微妙なのである。両書所収話は人名こそ異な

るが同文の傍線部は話の主要構成要素部そのものである。両者に直接関係があった可能性は捨てきれない。兼好は近くの双岡に草庵を結んでいたこともあり、52・53・218段などにも仁和寺関係話を挙げていることなどから、仁和寺と何らかの関係があったことは確かなようだ。『仁和寺諸師年譜』そのものを見なかったとしても、『年譜』の依拠資料に接する機会があった可能性は十分考えられよう。

『徒然草』の良覚は、生没・経歴などをうかがい知る歴史的資料がなく、『新後撰集』と『新続古今集』の掲載歌と詞書によって、弘長元年（一二六一）五〇歳で、嘉元年間（一三〇三～〇五）に生存していたことが知られる（安良岡氏、前掲書）。したがって良覚は信証（一〇八七～一一四二）より一〇〇年以上も後の人物であったわけだ。信証が人々に「堀池僧正」と呼ばれたことについては、『仁和寺諸師年譜』前半部の事績記事に「宝浄院僧正と号し、世に堀池僧正と申し、保延四年十月十一日僧正になった」とあるのによって確かめられる。それに対し、良覚がそうあだ名されていたことを確かめ得る資料はない。したがって、兼好は『仁和寺諸師年譜』或いはそれと同文の文献資料をもとに、人物を入れ替えて、本45段を記述したと認めても差し支えはないだろう。

二　45段の主題と創作性

（1）45段の主題の探求

兼好は素材話に人物以外にも改変の手を加えている。それを明らかにすることが、両者の関係を確定するとともに

に、本話の意味付けと、ここに配置した意図を客観的に跡付けることにもなろう。

兼好が45段で語りたかったことはいったい何であったのか。『徒然草』話と素材にした話と比較すると、人名以外に、「きはめて腹の悪しき人なりけり」（『徒然草』本文傍線部。以下同じ）の付加とともに、「寺門」を「坊」、「これを忌みて」を「この名しかるべからずとて」、「嫌ひて」を「腹を立ちて」に各々変え、「終に以て称号と為す」を採らない、という改変を行っている。ここに称号由来譚を良覚が「きはめて腹悪しき」性格の人だったとの話に兼好が作り変えていることが見てとれる。人々に三度もあだ名を付けられたのは、すべて良覚自身の性格によるものであったとしている。そのような性格でなければ一生「榎木の僧正」で終わったはずなのに、一つ一つに腹を立てたために三つもあだ名を付けられたのだ。さらに後々まで「堀池僧正」と呼ばれたのもすべて良覚自身の「腹の悪しき」性格が招いたものであった。素材話ではその点については「忌み」「嫌ひ」とあるだけで特に良覚の性格については触れていない。それに対し『徒然草』話は、三つもあだ名が付けられたのはすべて良覚の側に理由があったという一点を強調している。つまり、「世の中にあることにはすべて理由があってそれがある」ということを語るために創作的改変を行ったのである。従来言われてきたようではなく、兼好はこの主題設定のもとに意図的に叙述したことが明らかとなろう。

（2）45段の主題の検証――一貫した主題で一括される章段グループ

この主題は、続く46段以降50段まで一貫している。

46段は意表をつくあだ名のおかしさ（「日本古典文学全集」）とか、高僧にふさわしくないあだ名の由来（「新日本

古典文学大系」）など、従来45段とは「あだ名つながり」で捉えられている。

柳原の辺に、強盗の法印と呼ばるる僧ありけり。たびたび強盗に逢ひたるゆへに、此名を付きにけるとぞ。

46段はこれで全文。ここのあだ名は、45段とは違って法印本人の性格は関係してはいない。あだ名が付いた理由を「たびたび強盗に逢ひたるゆへ」と兼好は明示する。まさに45段の「このことがあることには理由があってのことである」という主題と完全に一致している。

47段は、清水寺参詣の途中同行することになった老尼が、道々「くさめくさめ」と言いながら行くので、或る人が何度もその理由を尋ねたところ、老尼は腹を立てて、「やら、鼻ひたる時、かくまじなはねば死ぬると申せば、養ひ君の比叡の山に児にておはします、ただ今もや鼻ひたまふらむと思へば、かく申ぞかし」と言った話。その老尼の言葉からして、とかく養い君への愛情のほうに目を奪われがちだが、何度も尋ねられたために、腹立ち紛れにいった言葉である。いわば言い訳でしかない。その言葉に老尼のひたむきな愛情があったか否かは、問題外のこと。言い訳の内容は、あくまでも自身の行動にそれ相当の理由があることを言っているに過ぎない。

続く48段。光親卿（鎌倉時代初期の人）が、後鳥羽上皇の前で食事をご馳走になった際、「食ひ散らしたる衝重ねを御簾の内へさし入て、まかり出で」てしまった。それを見た院の女房たちが批判したところ、上皇は「有職の振舞ひ、やむ事なきことなり」と何度も感心したという内容。従来、女房たちがあきれた光親の行為を語った話と読み取られている。が、女房たちはあきれているのではなく、「あなきたな、誰に取れとてか」と言い合ったのである。光親のとった行為について、その理由がわからないと言ったのだ。上皇はその行為を故事・典礼に従ったものとして、つまりこの行為にははっきりとした理由があるとして感心したわけである。上皇も女房も光親の行動の理由を

語るだけで、それ以外のことは一切話題にしていない。兼好の意図はその一点に絞られていることが分ろう。

49段は、「老来て、始て道を行ぜむと待ことなかれ」と始め、古い塚が多く少年のものである例から、死に際にやるべき時にやるべきことをしなかったことを後悔しても何もならないこと、つまり、人間は無常即ち死が迫ったことを忘れるべきでないことを述べ、それを実践した昔の二人の聖の例を挙げて終わる。冒頭の一文が主題と言われ続けてきた。しかし、45段からの連続に着目すると、叙述内容のすべてが、「無常が身に迫っているという理由があるのだから、そうしなければならない」という一点に向かっていることに気付かされる。兼好の意図はそこにあったと認められる。

50段は、「群集心理に足をすくわれてしまう人間の弱点がみごとに表現されている」（「日本古典文学全集」）とか、「世間の人が以下に流言飛語に惑わされやすいかの実例」（「新日本古典文学大系」）などと評されている有名な段。応長の頃（一三一一～一二）都と白河の人々が、鬼についての流言に右往左往した様子を兼好自身の実見聞として叙した上、兼好が人々から直接耳にしたと思われる「その後の病気流行の前兆であった」という言葉で結ぶ。兼好は、人から聞いた言葉を段末に置くことよって、「流言・デマが流行病の前兆であった」との独自の意味付けを行っている。つまり、ウソと思われたこともそれ相当の理由があったという。なお、この鬼の流言について、京中の騒ぎが田楽の盛行によると指摘した上、その田楽の騒ぎを背景にひっこめて、流言蜚語による鬼の騒ぎだけを前面に出して、それを焦点として描写したかったのかも知れず、それならば、彼の創作的要求によるとの、安良岡氏（前掲書）の推測がある。氏の推測の上に立っても、その創作の動機は「この世にあることには、すべて理由があってそれがある」というテーマに適った話に作り上げたということになろう。

以上45段～50段の六段は、50段を除き、見聞的記事を記述したいわゆる説話的な章段とされている段であり、兼好の評価を示す語が一切付けられていない章段群である。それが一貫したテーマの基に一まとまりのグループを形成していることが分かろう。その話の構成要素と記述は、設定した主題に必要なことだけに絞り込み、それ以外のことを一切書かない。そういう方法を兼好は意図的に採っている。これまでその実態が見えていなかったが、45段から50段までには、共通する一つの主題を設定し、それにふさわしい話作りと叙述に並々ならぬ熱意を注いでいる兼好の意図を読み取ることができる。45段はその始まりの段であったわけで、前項で探求した主題の再確認と、それを実現すべく兼好が行った創作的改変がこれによってはっきりと認められよう。

三　説話的章段44段からのアプローチ

『徒然草』の創作性の存在とその意図の一端を明らかにしたが、直前に位置する44段においても兼好の同様な方法が認められる。

44段は、秋の夜に、服装から見て高貴で若いと思われる男が田の細道を笛を吹いて行く、その後をついて行った兼好が、男の入って行った宮の山荘を覗き見ると、都以上に高貴で奥ゆかしい趣のある情景が見えたという内容。男の様子に興味を持たなかったら山荘の好ましい様子を見ることもなかったわけで、それによって偶然性とともにめったにない趣が山荘にあるのを発見したことを語ろうとしたものと読み取りうる。一切評語も付けず、「行かん方知らまほしく、見送りつつ行けば」、「車の見ゆるも、宮こよりは目とまる心ちして」とする叙述のあり方から、確

かに兼好自身の体験を書いたと思わせる仕様の段。これも41段から連続する四段が共通の主題で一括されるグループを形成している。

41段は、賀茂の競馬を木に登って見物していた法師が居眠りをして落ちそうになったのを、見る人が批判したのに対して、我々の方が愚かなのではとふと思いついた道理のほうが人々を感じさせたという、よく知られている段。人々の同意を求めて言ったわけではないのに、人々が感心するといった、この世で有り難いことが現実に起こったことが主題になっている。「見侍しが」、「我が心にふと思ひしままに」と直接経験の過去の助動詞「き」も使って、兼好の体験譚として書いている。ただし、兼好は見物人の一人でしかなく、思わずふと心に思った道理を言っただけの立場に留まり、評語も一切加えず自身の問題とは捉えていない。そのためか、これまで自讃の段とされる一方で、虚構された可能性も説かれている。続く42段は、兼好より三、四〇歳年長と思われる行雅僧都が晩年鬼のような顔になった上、目は頭の方につき、額のあたりが鼻になりなどするという、この世にあるとは信じられないような病気になって死んでしまった話。41段と並んで、体験・見聞譚仕様であるとともに、「あり得ないことが現実にあった」という主題でも共通している。

続く43段は、晩春の頃、卑しくない人の家の趣ある風情が見過ごしがたくて家の中を覗き見たところ、二〇歳くらいの容貌の美しい男の奥ゆかしい様子を目にした、つまり偶然から好ましい様子を見付けた話で、「いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし」と結ぶ、体験譚仕様の段。42段とは、年をとった醜い僧都と若い美しい男と対照的で、且つ41・42段同様、なかなかありえないことが現実にあったことが語られている。又、偶然自然の中で若い男に好ましい様子を発見したという点では、前掲した続く44段と対応する。

以上、41～44段の四段は「この世になかなか有り難いものが現実に存在しているのを発見した」という主題で共通し、一グループを形成していることが確認できよう。さらに、覗き見た結果自身の心に適うものを発見したという兼好の体験譚仕立の段は、43・44段以外に11・32段にも見られる。それら二段も兼好の体験譚仕立であるにもかかわらず、まったく具体的な人名が示されず、人物が特定できない点でも共通する。『徒然草』の中で兼好は、昔や一時代前までの人物については具体的人名をはっきりと記し、兼好の生存時と重なる時代の人物については、天皇・大臣関係以外の者は不思議に具体的な人物名を明らかにしていない。体験譚を装った創作的章段作成の際に兼好の採用した一つの方法であったようだ(注)。ここにおいても一貫した主題を言うのにあまりにもでき過ぎた話が並べられている。兼好がこんなに都合のよい体験をそうそうしていたわけでもなかろう。伝聞などを含め素材はあったにしても、兼好は一括した主題にふさわしい内容にするために、創作あるいは改変という方法を採ることによって数多くの説話的・体験譚的章段を記載することができたのであった。

四　人名の入れ替えの語るもの

前章までで、少なくとも41～50段は、大きく

41～44段――この世に有り難いものが、現実に存在している

45～50段――この世にあることは、すべて理由があって存在する

と対応した主題で一括される章段のグループによって構想・構成されていること、説話的・体験談的仕様の段には

創作的改変の方法がうかがわれることが明らかとなった。そこで、45段で残されていた、なぜ人物の入れ替えによる改変が必要だったのかという問題に立ち戻ってみよう。

すでに述べたように、依拠した資料の「堀池僧正」の信証は、良覚より一〇〇年以上前の仁和寺の僧正であった。兼好がわざわざ「良覚」に変えた理由はどこにあったのか。良覚は兼好二〇歳頃「前大僧正良覚」として嘉元年間（一三〇三～〇五）九〇歳余での生存が確認される（『新続古今集』巻第四、秋上）。兼好が最晩年の良覚と面識があった可能性も考えられよう。したがって、兼好は良覚に「堀池の僧正」というあだ名がなかったことは十分知っていたことだろう。にもかかわらず「堀池僧正」話を「良覚」と結び付けた。兼好はウソを承知の上で書いたわけだ。『徒然草』成立時からすると、良覚は三〇年以上前には故人になっていた人。仁和寺に関係のない人々にとっては、かすかに記憶に残っている人がいるかもしれない程度の人であったに違いない。

41～50段は説話的章段でも体験譚仕立の話を並べていた。したがって、この段の改変の理由も兼好の実体験譚とする必要があったことに求められよう。「堀池僧正」というあだ名からして「僧正」経験者で、しかも、そんなあだ名が付けられたこともあったと読者に思わせる人物でなければならなかった。当代の人物にすれば兼好の作り話であることが即座に読者にばれてしまう。体験譚として成り立たせるには、時間的な隔たりとしても、そんなこともあったかもしれないという気にさせる人物が必要であった。その点で、身近でそれほど有名ではなくどちらかといえば印象の薄かったと思われる僧正の「良覚」が最適任と、兼好は考えて選んだのだろう。つまり、「信証」話を「良覚」話にすることによって体験譚として『徒然草』に書き入れることができたのだ。45～50段のグループの冒頭に置くのには、性格付けの創作的付加以外に、体験譚とするための事実性の付与にどうしても人物の入れ替えが

不可欠だったのである。誰もが知っていたと思われる「公世の二位」を引き合いに出し、その兄と冠せずにはいられなかったのも、事実と見せかけようとする兼好の仕掛けであったことを語っていよう。人物の入れ替えには、以上のような作品作りの上からの強い要請があったのである。

或いは、兼好は自らの意図が伝わることを最優先し、同時代の読者に作り話であることを見破られてもよいと考えた結果の一方法だったのかも知れない。又、『徒然草』が成立後すぐに流布しなかった一因もこの辺りに考えられるが、ここでは指摘するに留めておく。

おわりに

『徒然草』45段を中心に主題と創作的改変のあり方の検証の結果、主題を設定した上で、それに適う話を一グループにまとめるという方法で作品作りに励んでいる兼好の姿が浮かび上がってきた。それは『徒然草』自体が、ある特定された目的・強力な意図のもとに創り上げられたことをはっきりと示していよう。『徒然草』は、「つれづれなるままに」「こころにうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書き付」けたものなどではなかったのである。読む側が一段一段滑稽で面白いとか、人生訓があるとか自分の興味で読むのは自由であり、それに耐えうる段も多い。しかし、作品としてはその根幹において、自身が追求する主題で一貫する章段グループを構想し、各章段を結び付けて配列している。『徒然草』は各章段毎に独立して読者の興味を引く面と、作品として各章段の連結とグループによって示される作者兼好の意図の二面性を持っていたのだ。序段も兼好の仕掛けた二面性に留意して読み取るべき

であったのだ。兼好は心に浮かぶとりとめもないことを一段一段脈絡もなく書き付けたとして、読者をその気にさせているだけだったのである。実は強力な目的と計算し尽くした構想のもとにしたたかな作品作りをしているのである。そういう視点から『徒然草』を読み直した時にはじめて、兼好が『徒然草』によって我々に伝えたかった意図と叫びが見えてくることになろう。本稿で明らかにした41～44段・45～50段以前も、1～11段・12～21段・22～32段・33～40段がそれぞれ一貫した主題で一括したグループを形成している。その具体的検証は別稿に譲るが、兼好の意図的な構想は想像以上に強力なものであったのである。

注

『徒然草』の説話的或いは体験譚仕立の章段における人名・地名の表記の仕方と創作性の問題については別稿を用意している

（本文引用は、新日本古典文学大系本（一九八九・一、岩波書店）による）